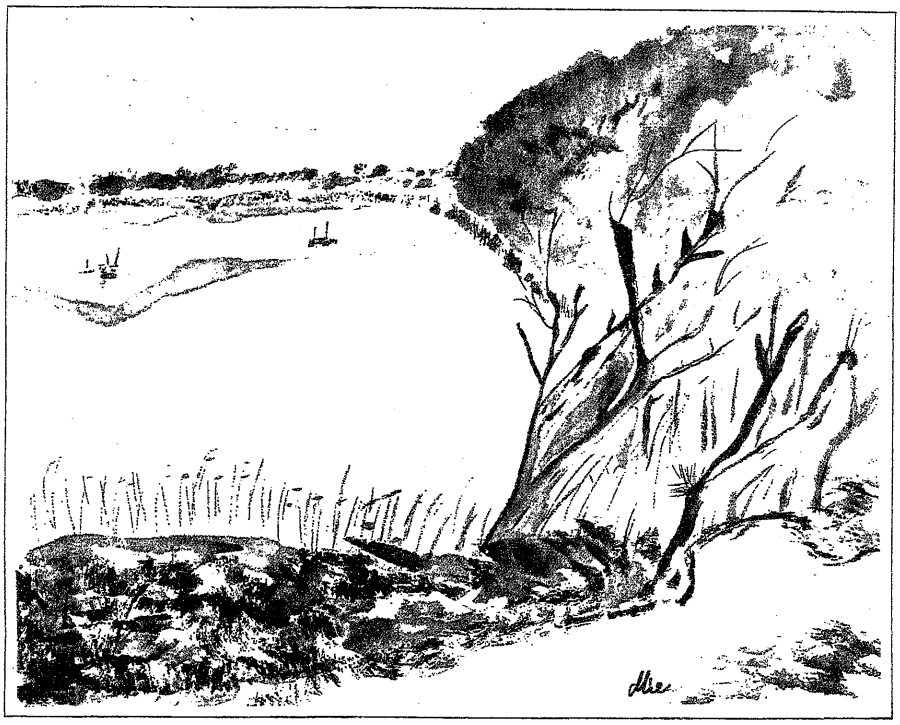
オリーブの樹

شجرة الزيتون

第24号

2003年5月30日

早期釈放!重刑策動をはね返し、重信さんを支えていこう!



目次

P　3　独居より⑭　地中海の真っ青な雲一つない空を思い出しながら　重信房子
P　7　プリズナージャーナル２３　検察側尋問への丸岡修証言１回目　重信房子
P１４　重信さんとの交流コーナー
P１６　投稿　米国に強制連行された南米移民　小林　忍
P１７　投稿　市会議員は街の旦那かーーお手盛り手当てに「ノー」の票　谷矢　健
P１８　読者からの声
P１９　シゲに捧げる「私小説」その２１　山田　美枝子

重信房子さんを支える会

花菖蒲 眸わしづかむ衝撃の
思いと共に咲く五月かな
房子

独居よい⑭　3月21日―5月10日

地中海の真っ青な雲一つない空を思い出しながら

重信房子

新房移転報告

３月２１日　侵略戦争が本格的に開始された日、アウト・ドア生活のような旧房から、真空パックのような新房に移転しました。朝食を追えて、順次午前中に手荷物を持って移動するということだったので、間際まで、庭の草樹を記憶に留めようと、しっかりキョロキョロと見続けていました。やっと、萌黄色に膨らみ始めた桜の新芽は、去年の彼岸には、満開だったのですが、今年はまだつぼみは固いまま。オオイヌノフグリの瑠璃色、ホトケノザの小さいピンク、ナズナの風に揺れている姿、タンポポの葉も大きくなり始めたのに。この「厳寒」と「猛暑」の、戸外にいるような旧房ともお別れです。啓蟄を経て、ゾウリムシは既に活発に畳みを移動中ですが、また、ゴキブリと蟻が顔を出していません。私は暑く、寒いこの古い房が、樹や草や、鳥、それに猫たちの自然に近い環境にあったので、ゴキブリでも気に入っていたのですが。

１０時過ぎ、新房へ。新しい房は、旧房よりも少し幅が広くなり、トイレ、洗面は清潔にしつらえてあり、三畳の畳（畳みもどきの化学繊維かと思います）があります。窓ははめ殺しで、空気は天井から循環するシステムのようです。窓の外は、回廊になっていて、その廊下を挟んで、ビルの壁です。この壁は、はめ殺しのすりガラスで、上と下に固定したルーバーが６段から７段ついていて、外の空気が出入りしている仕組みです。しかし、独房内の密封の息苦しさには、困りました。新房の初日の夜、さっそく空気がなく窒息して倒れこむ夢を見て、目が覚めました。

それに、これまで旧房に設置されていた鏡がなくなりました。さっそく、月曜日の週明けに、「願い事」の紙を提出しました。（ここでは、要求、抗議、意見は、「願い事」として書いて提出する仕組みなのです。あらゆる要求や仕事の一つ一つが、官僚的に紙で縛られています。紙で縛られている以上、こちらも紙でやり返すのが最良の方法です。きちんと記録され処理されるので、官僚制の回路を通して、改善を求めていくわけです。）

最初に、独房の密閉度。真空パックのいかに閉じ込めるかという発想だけで設計された、非人間的な独房にびっくりしましたが、次ぎの仰天は、お風呂です。風呂自体はユニットバスで新しく、清潔風でしたが、廊下に面したドアも中のドアも透明で、全裸が廊下から丸見えです。しかも係員たちのステーションが、その真ん前に設置してあり、彼女たちに監視させるつもりなのでしょう。余りにも無神経なつくりです。即また、抗議を「願い事」として書きました。「ビルの外は見えないようにすりガラスで、何でここだけ透明なのだ？被拘置者と係官双方に対するセクシャルハラスメントであり、無神経な男社会の判断で作られているので、即、改善すべき。少なくとも、全裸透明の必要ないドアの半分、模様のフィルム貼るなど、即、改善すべきだ」と書きました。その後通ると、ドアの下には、白い布をガムテープで貼り付けてありました。そして、次ぎの風呂の時には、ドアのノブから下のガラスがすりガラスに変わりました。そして、４月７日には、首の辺まですりガラスになりました。余りにひどいと考えたのでしょう。「あなたたちに対するセクハラでもあるのだから、しっかり言うべきです」と係りの女性たちにも言いましたが、「言いにくいのよ…」とのことです。

３月２５日に、初の運動「場」に出かけました。これは運動「房」ではないのか？！独房に畳み１畳の広さが加わっただけの狭さです。しかも、太陽光をわざわざ遮って、コンクリートのしきりで、電気もなく、暗い房です。２メートル四方の、一つの面だけが外界と繋がっています。その面には、３cm x ９cm の細かい鉄格子がはめられていて、空も 3cm x ９cm でしか見えないのです。運動房の回廊を挟んで、外側のビルの壁全体は、上向きの固定ルーバーで、覆われています。ブラインドがこの階全体を被っているようで、暗いままです。前は土と空のもとで、運動していたので、小さなスペースでも、息ができる運動場でした。新舎のこれが一番不満です。運動にも、健康にも、人権にも光さえ当てないなんて！早速改善願いを出しました。

①斜めに光を遮っている固定ブラインドを水平にすること。②ベランダに草花を置くこと。③ラジオ体操の電源設備もないというし、縄跳もないというが、前に在った物を改悪せず、設置して欲しい。④月１回は、戸外運動場の土のあるところで、運動できるようにしてほしい。⑤運動房は、鉄筋にボルトナットで、

コンクリート版を止めて仕切ってあるので、仕切りを取っ払って、二つの運動場を一つに広げて欲しい。狭すぎて目が回るのでなど、運動房に関しては、上記改善要求を提出しています。

３月２７日　女区々長に呼ばれて、「改善の方向を考えているが、女区だけでなく、東拘全体の計画と予算で実行するので、時間が要ります」とのことでしたが、わざわざ面談に呼んだのは、４月からの任務変更のための引継ぎのようでした。

とにかく、これまでで改善されたのは、ドアと鏡。もちろん鏡の部屋への設置はまだです。鏡は、「設置されるまで、当面、担当の所に置いて、面会や身だしなみなど必要な時に貸与するようにして欲しい」という改善願いは、４月７日から実行に移されました。今後も、とにかく強いられた居房条件の改善を続けていくしかありません。

４月８日　運動場に行ったら、風の強い日で、ビル風がゴーゴー言っていましたが、風に乗って、桜の花びらが、運動房に届きました。あぁ、去年あんなに美しかった庭の桜が咲いて届いた！と、なんだか嬉しくて、舞い落ちた８片の花びらを数えました。手の平に乗せて、３cm x ９cmの格子の隙間からふーっと吹いて再び外に送ると、風に舞いながら遠くへと昇っていきました。（このみごとな旧房の桜の大木も、設計上では、切り倒すことになっていると聞いたので、既に「切り倒さないで！」と「願い事」を書きましたが、エコロジーや人間性に配慮しない管理者たちは、無視するでしょうか。）新舎房の便利に管理するシステムは、いまだ現場の係りには、旧システム（拘置者との日常的やり取りは、これまでと同じ）に、不必要なほどわずらわしい暗証システムのドアの開閉やらの新システムが加わり、歩く距離も倍以上で、重労働で、バタバタしているように見うけられます。

かつて、イラン人東拘脱走事件というのがあったけど、そんな事件の頃、設計したのでしょうか？閉じ込めるための一念で、こんなに非人間的な設計になったのでしょうか？名古屋刑務所の拷問殺人事件と相共通する発想を見る思いのする“新舎”です。名古屋は野蛮に、新舎はモダンに。どちらも被拘束者を同じ人間と考えていないという気がします。この限られた条件で、「男支配の発想」や「人間性無視」に、一つ一つ小さくても改善を求めつつ行きます。

でも、そんな身の回りの変化より大きく大切な変化は、イラクへの侵略と占領のニュースです。限られた条件で、憤りつつ、気になって仕方がありません。侵略戦争は、バグダッド占領に至っている、と４月８日には伝えています。

イラクの民衆は、独裁者も、侵略者も許さず、圧倒的な暴力、恐怖、虐殺にすら、苦難と逆境の中から超えていくでしょう。今も、侵略者は、力の信仰による支配を欲しいままにしようとしています。ブッシュ政権のポスト冷戦の世界秩序が、今見え始めています。力によるアメリカの価値の地球大の普遍化、やっぱり「十字軍」だったのじゃないか、とアラブの民衆は怒っているでしょう。多元的な価値の共生による、人権に基づく協調社会を失わせてはならない！これから、傲慢な「十字軍」に対して、粘り強い抵抗運動として、民衆の中から、かつてない力が育つでしょう。誰も他人への従属をよしとしないのですから。

（４月９日記）

米英軍イラク占領から全中東、世界支配を目論む人々

４月９日　米英軍のバグダッドへの占領が今語られ、アルジャジーラ他の報道関係者への攻撃が意図的になされたというニュースが、ちょうど４月９日、アルジャジーラの抗議の記事として載っています。法的、道義的にも正義性のない侵略は、既に「オリーブの樹」でも、カラス天狗さんが語られていたように、「全中東民主化、市場経済化計画」として進められているようです。この計画の立案者の国防政策委員会委員長だった「暗黒の王子」と呼ばれるリチャード・パールは、イスラエル国籍も持つ、イスラエルの新聞の主幹も経験した人物です。彼も属しているネオコンとして、今有名になっているＰＮＡＣ（「新アメリカの世紀プロジェクト」）という団体は、１９９７年に設立されたとのことですが、そのちょうど１００年前の１８９７年の「プロトコール」を思わせます。（「プロトコール」とは、ユダヤ議定書とも言われています。「世界征服計画」が書かれていて、ユダヤ人はもちろん、「これは、偽者で、ユダヤ人を陥れるための文書」といいます。１９７９年イラン革命の後、各国に在るイラン大使館が「シオニストの計画書」として、各国語に訳して配ったものです。「プロトコール」が昔から「ユダヤ陰謀史観」に悪用されたといわれています。真偽はどうあれ、私も読んでみて、「共産党宣言」をマルクスが書く頃の１００年前に、こんな戦略を書く能力のある人がいたことに驚きました。）

「プロトコール」を思い出すのは、ＰＮＡＣには、「新

１００年計画」のような傲慢な世界支配計画を感じるからです。２００２年６月に、Ｒ・ケーガン（ＰＮＡＣのイデオローグ）が「権力と弱さ」という論文を書いたと週刊誌記事の孫引きで読みましたが、どうもネオコンの人々は、アメリカは、ホッブスの言った「リヴァイアサン」として振舞うべきだと自惚れ、協調ではなく唯一全能の力による支配によって、秩序形成を求めるということのようです。

ブッシュ政権のこれらのネオコンの人脈は、レーガン時代に、“パレスチナ独立国家不要、ヨルダンとの併合による連邦国家”という８０年代のレーガン案を目論んだ人々でもあります。今やもっとイスラエル寄りで、領土の占領を拡大し、パレスチナ人を追放する危険もあります。

ただ、この人々の特徴は、過去の敗北の根拠を力と技術に求めるところにあるようです。ベトナム戦争の敗北の原因も学び得ない結果として、今も力による占領を欲しいままにしようとしているのでしょう。民衆の人間らしい生活は、社会を求める不退転の力が、南ベトナム傀儡の非人道的支配と、それに加担した侵略者アメリカを敗北させました。ベトナムの、世界の民衆の声は、アメリカ民衆の反戦と平和を求める意志に引き継がれ、アメリカ政府の誤った侵略を正しながら来たのです。

こうした教訓よりも「力さえあれば、アメリカの意のままになる」と考えるＰＮＡＣの連中が、今戦争を始めました。そして、占領後も自分たちで国連やアラブにも命令したいようです。

一部のアメリカの富裕層と国際シオニズムの利益に合わせたブッシュ政権、戦争消費によって利益を独占できる軍需産業や、石油、エネルギーの利益と支配のために、そして更に「十字軍」よろしく、異教徒への侵略に価値が深くあるようです。この「中東民主化」の支配を通して、人権と国際協調を旨とする「古臭いヨーロッパ」の価値観の破壊を目指すというのが、意図です。

「強い者に従うことを教えてやる」という態度は、「命を賭け、血を流した者が、占領と支配の権利がある」と、協調を拒絶しています。英日の「同盟者」たちは、自国の反戦の民衆の意志に制約されて、国連の「お墨付き」を大切にしようと、ブッシュに「お願い」し続けるでしょう。「お願い」という関係性しか作れないのですが。

ＰＮＡＣのネオコンらの目指す「新しい国際秩序」は、アメリカの利益に基づいて、地政学的に従属的同盟国を配置し、階層的に「差別化」することを支配の鍵としています。その要は、力による核軍事技術力の独裁です。日本政府が「マヌケ」な振りをしながら、主導的にその一角を形成しようとする姿を、見逃すわけにはいきません。

しかし、今、世界の反戦平和を無視した力の支配が続く限り、アラブでも、世界でも、そして、アメリカでも、更に反戦の意志は、民衆の侮れない力として育つでしょう。育てなければと、世界の良心は決意していると思います。民衆連帯を育てる中で、「力」リヴァイアサンの怪物に、立ち向かえるからです。人権に基づく国際協調によってしか、この多元的な地球が共生し得ないことを、実体としても知らしめるでしょう。それはまた、アメリカが下部機能化をたくらむ国連の中からも、民衆の意志を背景に、各国が各国関係の対等や民主化の道を逆に育てるでしょう。この未来の国際秩序を決する時に、日本の中での反戦と頑固な平和宣言が今ほど問われる時はありません。

（４月９日記）

５月９日　「オリーブの樹２３号」を入手しました。「ライラ・ハリッドさんの証言特集」を読みながら、再び、熱い思いにとらわれます。日本滞在中に、イラクへの侵略戦争が開始されたために、ライラさんは全てをキャンセルして帰られたと聞きました。そして、その後無事にヨルダンに戻り、精力的に国会議員として、女性総同盟のリーダーとして、不当なイラク侵略戦争に対応した膨大な仕事をしているようです。イラク在住のパレスチナ難民の受け入れや、またシャロン政権の戦争に連動した占領地での新たな弾圧の企てに対して、様々に闘いつづけていることなど、少ない情報の中から知ることができました。

そんな彼女を「苦労のない私が、苦労多き人々に助けてもらって…」と思い返しています。「オリーブの樹２３号」には、「パレスチナ、イラク、アラブ人民に連帯し、アメリカ、イギリス軍の侵略に抗議します」という、私の４月１８日の公判提起の意見書の一部も載っています。結局、４月１８日公判は、キャンセルされたために、５月１３日公判へと引き継がれています。

アメリカ軍による侵略と占領は、サダム政権にかわって、イラクに暴力と破壊と不信を広げ、住民に発砲するなど、占領軍の弱点をさらけ出しています。占領軍兵士は、住民を恐れて発砲を繰り返す一方で、武器消費の特需や破壊された街や橋や施設のインフラ特需もアメリカの独占企業のトップを潤わせています。Ｏ

ＰＥＣ支配の要としてのイラクの石油も、第一次大戦を経て形成された「列強」による中東植民地支配の地図をアメリカが今、イラクをステーションに、アメリカ支配地図に塗り替えようとしています。

ブッシュ大統領がこれまで発表を抑えこんできた、４者会議の「ロード・マップ」が、４月３０日示されましたが、レバノン侵略、ＰＬＯ追放の直後、８２年９月１日に表明されたレーガンの“中東和平案”を思わずにはいられません。イスラエルの安全保障を第１とし、アメリカ・イスラエルの戦略的同盟のもとに、中東の資本主義市場化を目指し、「パレスチナ人の国」を認めても、後にヨルダンとの連邦国家として併合するという案でした。自立できない“国家”は、イスラエルに従属するか、ヨルダンの併合によって、連邦として成り立つかしかないと、当時、一方的に語られたものです。「ヨルダンというパレスチナ人の国があるじゃないか」などというアメリカ側の議論もありました。（当時、抵抗運動を担っていた人々が、イラクのサダム大統領のイランへの侵略に反対して、追放逮捕され始めた後に、サダム大統領と安全保障について話し合うべく、レーガンの特使として、バグダッドを訪問したのもラムズフェルドだったのを思い出します。）

５月　リッダ闘争の闘われた、地中海の真っ青な晴天の５月の雲一つない空を思い出しながら、ライラのこと、「ロード・マップ」によって新しい植民地政策の危険の中にある、パレスチナの人々のことを考えています。イスラエルに優位を保証するスターとラインとなる「ロード・マップ」すら、シャロンは「パレスチナ側が帰還の権利を放棄すると宣言しろ」とか、「入植の継続を認めろ」とか、始まる前から、「ロード・マップ」の修正を求めて、ゴネていましたが。）

７２年５月のあの頃の青い空の下、自らを含む経験を、歴史の節目、一つのスタート・ラインのように見詰めながら、今を照り返しています。「占領を終わらせる」という解放の希望に溢れ、信念固く抵抗運動の正義を語った仲間たち。その闘いの前進のために、自らの生も死も捧げた様々な闘い、リッダ闘争の戦士たちも、ライラも、無数の仲間たちの闘いが、当時見向きもされなかったパレスチナ人の不当な悲惨を世界に一歩一歩と、知らしめたのだと、しみじみ思います。

そして、２１世紀の今、パレスチナはむしろ、「世界の焦点」の位置に押し上げられています。パレスチナ解放の闘いに、冷戦の中で、有利に闘えた側面も、不利や困難を導いた側面もありました。けれど、今は、“人民が決定者となる時代”の明るい側面を、パレスチナやアラブの闘いの中に求めることができます。アメリカが“リヴァイアサン”として、「衝撃と恐怖」の“強制力”として世界に君臨しようとする時、「主権者」として、公正な正義、公正な民主主義をもっとも明確に、もっとも正当に表明する位置にあるからです。今こそ、ダブルスタンダードを許さない、不公平な位置に置かれていることを明解に示し、公正と正義に基づく取り決めを民主主義として主張する位置に立っているからです。それは、虐殺者、占領者シャロンとしても、居心地のいいはずがありません。それはまた、イスラエル・アメリカの「ハードウェアー」に対して「ソフトウェアー」の方法で闘われている世界各地の市民、人民の声に連なる様々な無限大の力と結び付くでしょう。

パレスチナ・アラブへと連帯する力は、連帯する彼らに照り返されて、ブーメランのように、私たちや、アメリカ本土の反戦の力を更に育てるでしょう。連帯の相互関係が実体化される、越境する人民の連帯の時代がどんどん開かれていきそうです。（そう思わないと、やられっぱなしの戦場は、たまらない！）

北朝鮮を巡って、アジアをも戦場化しようとする動きに予防する力は、やっぱり各国の政権を揺るがす民衆の、市民の強い反戦の意志をこそ！です。

５月、リッダ闘争の戦士たちを再び思い、共に闘ってきたパレスチナの戦士たちを思い、自分の歩みを問い返す時として、５月を過ごしたいと思います。若葉の美しい５月、独房は季節感を奪われています。でも、はめ殺しの窓の脇、両サイド１０センチ幅の通気孔のロックがはずされてから、ルーバーを越えた風が少し入ってきてほっとしています。

手製の風車が、少しだけくるくると回ります。なんだかそれだけで、５月の晴れた地中海を思い、若いまま今も私の胸に生きている仲間、友人たちを思います。岡本同志も亡命の地レバノンで、友人たちと、どんな５月を迎えているでしょうか？

“リヴァイアサン”が、上から「衝撃と恐怖」でくるなら、正義に基づく民主的な和平を求めて、住民、人民は、陽気に下からひっくり返しながら、２１世紀人間らしさで勝負していくでしょう。新しい公正な正義を求める中で、新しい連帯が育つ予兆を感じつつ、風車の小さな風を見ています。　（５月１０日記）

プリズナージャーナル 23

重信房子

第29回公判出延記 5月13日 検察側尋問への丸岡修証言1回目

通し新緑を遮る車窓をて

昨日は思いがけず雨もようとなって、今日は朝方雨マークで、日中は曇り日と昨日から言っています。３月１４日のライラ公判以来の、そして新舎に移って以来の、外界にふれるチャンスです。待ちのぞんでいたのに、天気が悪いのは残念です。明け方５時頃でしょうか、東向きの部屋に、独房の透明ガラスの回廊を越えたビルのカベとなるスリガラスに、太陽のぼんやりとした日射が訪れています。少し晴れるかもしれないな……と思いつつ起きて準備をはじめました。もう寒さを感じない朝です。

今日は４月１８日の前回の公判が裁判長の病気でキャンセルとなったために、第２９回となり、４月に予定されていた右陪席裁判官の変更にともなった、裁判所の更新手続を、ズレこんで行うことになっています。更新手続にあわせて書いた、私の意見書もちょうど米軍のバグダッド占領時に書いたものですが、第一項が、アメリカ・イギリス軍の侵略と占領に対する抗議から始まっていました。ちょうど、パウエル国務長官がイスラエルとパレスチナの両首相に会っていた、というニュースそ聞いたので、その内容に、ロードマップのことなどにも触れる内容を加えています。早朝に意見書に数行加えたりしているうちにもう起床時間。

即、出発準備にとりかかります。空も、鳥も、樹もあった、みずみずしい庭を持つ旧房に居たのに、新しい房は自然と日常的に触れ合えない分、外出で若葉が見たいと、希望ばかりふくらませています。食事を早めに配られ、７時４０分早めに呼び出しです。房から出て廊下を進み、エレベーターのところに３人集合して、すでに手錠装備をしているところに私が加わって拘置者４名です。エレベーターで地下１階に降りて、そこからマイクロバスに乗って出発。

マイクロバスが地下から工事中の脇を抜けて、いつもの正門の方に進むと、閉じたカーテンの隙間から、赤とピンクのバラの花が咲いているのが見えました。旧房の美しいバラもまっさかりに咲いているだろうな……と思いつつ正門に近づくと、ツツジが咲いていました。うれしい花です。

高速に入ると、春霞のように曇り空はぼんやりとして、少し蒸し暑いような朝です。荒川の土手には姫女苑（ひめじょおん）が咲き乱れて、緑の中に花々が揺れ、思わず声がもれるほど感動。土手の上を犬をつれている人やジョギングの人など、ずいぶん人並がふえたなあと、３月以来の川辺を見ているのがたのしい。でもマイクロバスの窓ガラスが、茶系統のフィルムでコーティングされているために、その色が邪魔して、若い緑が全部深緑になってしまって、新緑の美しさを味わえないのが残念です。

土手の人々をながめながら、荒川沿いを走って高速道まっしぐら。今日も予定どおりのコースで高速道路を渋滞なく進みます。

白鬚橋から桜橋のあたりにさしかかると、３月までの寒さにはポツンポツンとしていたビニールハウスが、列をなして川べりにふえています。すでに隅田川の桜葉は茂り、東側の牛嶋神社の境内の新芽の美しさに目を転じたけれど、コーティングの茶のフィルムのせいで、色調が若葉を見せてくれず茂った感じです。あーあ、新緑を味わえないなあなどと考えていました。

デジタル表示は８：１２、温度は２０℃。少し蒸す朝ですが、表示を見ながら隅田川東岸から渡って西岸に高速道路が延びていく新大橋に至るあたり、都鳥があちこちに浮び、また滑降しながら群れています。

なんだか地中海の海を思い出します。地中海の５月、真紅のケシの花の咲く岩場に腰を下ろして、サンセットを見た日々。リッダ闘争の戦士たち、ライラのこと、パレスチナで、イラクで、闘っている旧友たちのこと、５月の日射しの中で、考えているうちに、再びカーテンを閉じられて、ふと我に返ると、東劇のところから高速を出て、東銀座から西へ進むところです。

前方を見るとツツジのけたたましい色彩が、あちこちの垣根や植込みから目にとびこんできます。昔はそんなに好きではなかったツツジも、花である自己主張の強さゆえに、閉じられた隙間から見れるのがうれしい。

８時３０分過ぎに地裁に到着。

開廷のときめき

１０４法廷に１３：１５着。病気と聞いていた裁判長が、前とかわらない様子で泰然と座っています。左陪席の女性裁判官は前と同じ人で、右陪席にかわったと思われる人が座っています。この間、右陪席の裁判官がくるくる替わっていたので、この方々が今後専任の方々なのかな、と思いつつ礼をすると、「傍聴の人々を」と、裁判長が促しました。

なつかしい顔がどっと入ってきました。昨日満期刑期を終えた戸平さんが、懲役でいっそう痩せたようですが、元気そうにステキな紺の背広姿で、旧友たちと共に入ってきました。ジェラシ山の映画の戦友や、思いがけない人や、関西からの友人や、大学時代の友人や、高校時代の友人や、丸岡さんの友人たちなど、すぐ満員のようで、全員が座ったのを確認して、裁判長が言いました。

「それでは開廷します。前回は私が体調をこわして、休廷となり、申し訳ありませんでした。今後はこういうことを絶対起こさないよう心がけます」と誠実に表明したためでしょう。すかさず、傍聴席から、「病気だから、仕方ないよ！」と、いいよという感じで、恐縮してわびる裁判長に誰かが大声で応えたので、どっと笑いで、場がゆるやかになりました。

「裁判所の構成が変わりましたので、更新手続をまず行います。ご意見をまず」と裁判長が促すと、弁護士が「被告人から」と答えて、私を促しました。弁護士にすでに準備している意見書のコピーに修正があるが、一応のちに差し換えることを確認して、私の意見提起を行いました。

更新手続き―被告人の意見陳述

意見提起の第１は、「パレスチナ、イラク、アラブ人民に連帯し、アメリカ・イギリス軍の侵略と占領に抗議します」と、ライラ証人の言葉を引用しながら伝えました。（「オリーブの樹」２３号参照）「イラク占領を経て、４月３０日にブッシュ大統領によって表明された『ロードマップ』にも、いまだ公正な仲介者としての内容が示されずにいます。なぜなら『ロードマップ』のスタートから、原因と結果をとりちがえ、占領という原因をとりのぞかずに、パレスチナ側の新しい首相に、イスラエルの安全保障を負わせようとするからです」と、ダブルスタンダードで苦しめられてきた人々のことを、「ロードマップ」にも言及して、朝に追加した点も加えて読みあげました。

第２項目は、第２９回法廷を迎えて、第１回からの公判を経過的にとらえ返し、その上で、「現状、公訴事実に対してどういう考えにたっているか」を表明しました。

第３項目では、「今後の公判に向けて、ライラ証言に言及したい」として、ライラ証言によって明らかになった点をふまえて、公正な検証を求めたものです。

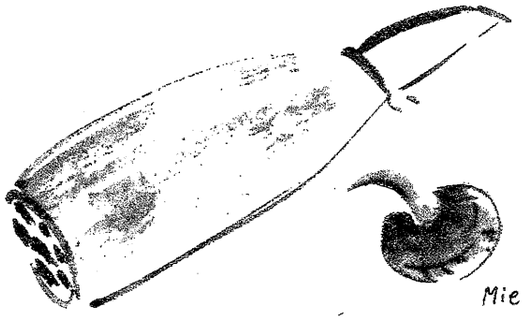
その第１はハーグ作戦の概念とその意味についてです。「国連憲章の一項に、占領下にある人民は、その占領に対して抵抗する権利、武器を持って闘う権利も含めて、認められています。パレスチナの占領に対する解放の闘いは、同時にパレスチナ人の唯一合法的代表としてのＰＬＯを認めています。従って、ＰＬＯを承認したすべての国にあっては、パレスチナ解放の闘争の一部として扱われてきたこうした闘いを裁く権利はありません」というライラの証言した点から、もう一度「ハーグ作戦」の当時の全体の状況をふまえ、国際法と国際慣例に基づいてとらえ返すべきではないか？ということ。

第２に、殺人未遂罪の適用についてです。当初私は、「ハーグ事件の逮捕・監禁罪」として逮捕されながら、のちになって「殺人未遂罪」を追加された不当性を問いました。またライラ証言による、当時のＰＦＬＰの、自衛の手段としての武器の使用の原則をふまえ、殺人未遂罪の適用が不当である点を訴えました。この罪名は、重刑化をなすために付け加えられ、私のみならずハーグ被告全体への重刑をもたらす作為のあるものなので、撤回を要求しました。

第３に、ライラ証言で示されたように、国際社会やパレスチナの正義が日本で考えていることと違っており、世の中にいくつもの正義が存在し、その一角に旧日本赤軍の闘いがあったことをふまえる必要があることを訴えました。そしてこのハーグ作戦に対する、私への政治的報復として訴追していることを批判し、ライラ証言に応える意味でも無罪を証明したいと表明しました。

そして第４項目は、この間の弁護側証人の丸岡証言やライラ証言をふまえつつ、当時の自らの主体状況のとらえ返しと教訓として、同志友人たちへの自己批判と感謝を伝え、さらに今後とも闘いつづける決意の表明です。

「これで私の意見表明を終ります」と言って、裁判官席と傍聴席におじぎをすると、“一斉に”と表現してもいいほどたくさんの拍手が私を包みました。拍手をしてはいけないという決まりを知らない人もいたみたいで、裁判長が「拍手はやめてください。ルールを守ってください」と、制しました。席に戻って傍聴席を見ると、みんなの仕種ややさしい表情が賛意のゼスチャーを送ってくれます。時計を見ると１時５０分です。３０分と少しくらいかけて提起しました。



丸岡証人を待つ

裁判長は「他には？　証拠関係は従前どおりということで、よろしいですね？」と弁護士と検事に確認を求めて、「それでは、更新手続はこれで終わります」と告げました。「それでは、今日は丸岡証人。それでは……」と裁判長。扉の外に迎えに行った事務官が戻って来て、裁判長に何か告げました。「えー、到着が遅れていますので、お待ちください」ということで、その間ざわざわとしたまま待っています。

私の方は、これからどう公判の筆記をすべきか……と考えていました。というのは弁護士から公判タイドを改めるようヒハンされてしまったためです。「ライラさんや丸岡証人など、一生に何度もありえない証人を前にして、書くことに熱中して顔もあげないのは失礼ではないか？　公判参加が書くことになって書記官ではないでしょ！」と言われて反省したためです。言われてみると本末転倒だったな……書くことに自分の役割を見出し、そこにはまり込んでしまっていた……傍聴の人々とも顔をあわさず、ライラ証人にも目を見て語りたいと思いつつ、正確に書き取ることに熱中してしまった……書けば正確さが気になり、ますますはまってしまったな……と反省。記憶力の減退をメモ化で補っているのが実情ですが、改めよう、まず被告としての位置について書くことを自己目的化しない、と決めて臨むことにしたのです。

丸岡証人登場

丸岡さんを待つ間、友人の素敵な服装をゼスチャーでほめたり、友人とあいさつしたり、うーん、被告として書かなくなると、余計タイドが悪くなりそうなどと反省しているうちに、８分たって１時５８分、ガタンとドアがあいて、丸岡証人登場。

また痩せたように思います。濃いうぐいす色のジャンパーにカーキ色のズボン、シャキシャキと元気そうに登場し、傍聴席を見渡しています。みんないっせいに手をふってあいさつ。なぜか今日の丸さんの警備は意地悪い若手グループで、手錠をはずす間も傍聴席を見ようとする丸さんを制して、正面を、つまり傍聴席に尻を向けさせようと強制する連中です。顔を傍聴席に向ける、そんなことで公判を乱すのでもなんでもないのに、わざわざ意地悪しているとしか思えません。

これまでの丸岡調書の訂正要求

丸岡証人に、宣誓の効力が生きていることを裁判長が確認しました。これから検事側から反対尋問するのかと思ったら「それでは弁護人の方から」と言って、大谷弁護士が立ちあがりました。

大谷弁護士は、「すでに３回の公判の調書記録が丸岡証人に送られたところで、丸岡証人からその記録に対する誤記、聞き取り間違いに対する訂正要求リストが出ているので、その点を確認します」と、すでに裁判官、弁護士、検事で事前に了解していたらしく、弁護士とのやりとりがはじまりました。

３回の調書で５０ヶ所以上の訂正要求リストのようです。一つ一つ行いました。たとえば、「実戦的」ではなく「実践的」とか、「連隊」でなく「連帯」とか、「新風主義の国」でなく「進歩主義の国」とか、聞き取りから書記がおこす誤記に対する訂正が行われ、公判記録の再録される作業として行われました。

「ハーグ」当日の朝になって目標をカルロス氏から初めて知らされた者は、西川さんになっているが、和光さんとの訂正もありました。それを終了して時計を見ると、２時３０分を過ぎていました。

日本出国の頃

その後から検事側の反対尋問がはじまりました。まず西谷検事は、「今訂正しているように、公判調書は持っているのですね？」と聞き、「いただきました」と丸岡証人が答えると、「読んでいるので、これまでのことは記憶が鮮明か？」をたずねました。「前のことだから――、いちおう覚えていると思い

ます」と丸岡証人がこたえてスタートしました。

西谷検事は、「主尋問にそって確認していきたい」と、丸岡証人が日本を出発する時の状況をたずねました。

西谷検事「Ｉからアラブに行ってどういう活動をするか聞いていましたか？」

丸岡証人「具体的にはなく、自分で勝手にイメージしていた。軍事訓練、政治討議、レクチャーを受ける、アラブの実態を知るとか」と答えると、「武装闘争に参加するということは言われなかったのか？」と質問し、「そういうふうには言われなかったし、そういうふうには理解していなかった」と答えています。証人の方は帰国できるかどうか、というのを条件としていたし、余計なことは言わない聞かない、という活動の仕方をとっていたので、そうではない、と答えました。言葉をかえて検事は「パレスチナで実戦を受け持つ考えだったかどうか？」とさらに聞きました。「プラクティスの実践、闘いという意味ではなく」と、丸岡さんがアラブに行っていたバーシムたちのところに行った意図を述べました。

最初の質問では武装闘争を前提にして送り出したり、出発したりしたのか？をたずねていたようです。次の質問は「桧森さんと会った」と丸岡さんが前に証言したことに関して、何回会ったのか、桧森さんから闘争に参加しないかとか、帰らないつもりでとか言われなかったか、桧森さん自身は７１年９月ベイルートに行き、７２年２月に帰国しているが、どんな目的で帰国したか。桧森は岡本、丸岡を送り出すために帰国したのではないか？などと質問しました。

丸岡さんは、桧森さんとは２回会って話したが、現地での連絡方法、ビザをどう申請するかなどの実務的な話しかしていないこと、桧森さん自身からはどんな目的で帰国したか聞いていないが、アラブに行ってから聞いたこととして、山田さんが訓練中水死したことがあって、遺体を親族に返すこともあって、帰国したというのを聞いたことなどを答えていました。

送りだし部隊のこと

さらに検事は、リッダ闘争以外の作戦で日本から送り出したのではないか？　他の作戦を想定していたことは聞いたか？　エルアル（イスラエル航空）機の乗っ取りではないか？　ハイジャック作戦のため送り出すために、桧森が帰ってきていたのではないか？　と質問しました。丸岡さんは、あとでアラブで聞いたこととして、そうだったことを認め、当時桧森さんからの話としては、丸岡さんに全くされていなかったこと、Ｉさんから何か聞いているという前提で桧森さんが言わなかったのかもしれないが、余計なことは言わない聞かないという関係だった、と答えています。「そのエルアルのハイジャック作戦はその後どうなったのか？」と検事の質問に対し、「奥平から、連赤があって変更したと聞いた」と答えています。

さらに「証人の出国費用は誰が工面したのか？」と質問し、丸岡さんが、「会社員やっていたので自分で工面した」と答えましたが、更に「Ｉからお金をもらったのではないか」の質問を受け、「Ｉからは１０万円もらった」と答えました。「桧森さんからは？」と聞きました。丸岡さんが「ない」と答えると「二回目に桧森に会った時、７、８万もらったのではないか？」と、さらに聞きました。古い調書か何かにそういう記述があるのでしょうか。（編集注：本人によれば、Ｈ、Ｉ両氏の７２年作成供述調書があるとのことです）丸岡さんは「記憶にない」と答えました。

リッダ闘争後

次の質問として、「リッダ闘争の後の話をうかがいたい」と、検事は「主尋問で『依頼された仕事があったので』と言ってたが、それは何か？」とたずねました。

丸岡「言いたくないです」

検事「誰から？」

丸岡「アブハニ」

検事「どこのことですか？」

丸岡「東南アジア」

言いたくないと言いつつ、答えています。（編集注：本人によれば、指示者と場所は、最初から答える予定であり、指示の中身を言いたくない、としたとのことです。）

西谷検事「その後、かわりの旅券ができるまでフランスに居たと言ったが、いつまで居たのか？」

丸岡「８月中旬まで」

検事「中東に戻ったのはいつ？」

丸岡「８月中旬」

検事「フランスのどこに居たのか？　パリか？」

丸岡「いちおうパリということにしておいてください」

検事「ということは、パリではないということですね。１１月中旬までいたのではないですか？」

丸岡「それはない」と言うと、

西谷検事は、かわりの旅券ができるまでと言ったが、どういう旅券で、どういうふうにしてそれを入手したのか、とたずねていました。丸岡さんは、「ドクターの人脈」とだけ答えました。

被告の当時の活動

次に検事は、「重信被告は赤軍派として国際部代表としていたのではないか」と質問しました。丸岡証人は、アラブで名前は知らなかったが、赤軍派として活動していたことは、話を聞いたことがある、と友人から聞いたことを言いました。

検事は「重信被告が国際根拠地、アブハニとの間に国際革命協議会設立をめざしていたと聞いたことはないか？」と、質問しました。

丸岡「革命協議会はのちのことで、対象もアブハニではない」と答えました。

アブハニとの間でのことでと、再質問されて、証人は、「アブハニとの間ではない。あくまでＰＦＬＰ、解放勢力の間の話で、それも７４年１１月以降の話だ」と答えました。西谷検事はさらに「重信被告がリッダ闘争のあと、ＰＦＬＰの保護下に入ったということについてうかがいたい」と言いました。具体的には、政治局の庇護下は、重信だが、私はドクターの庇護下だし、他の人もそれぞれの活動、委員会の庇護下にあったことを述べています。

重信の身辺警護

さらに、アブハニから重信の身辺警護を日本人に指示することがあるかどうか？という質問がされました。丸岡証人は、関連がなければボディーガード役で出ないが、日本人同士でどこか行くなら、そういうこともありうる、と答えました。

また、「当時の重信に対する警備は、外部の人間は接触できないのか？」とか「途中から警備がゆるくなったことはないのか？」などとたずねました。丸岡証人は、“接触しようとすれば、各々の部局に申請して許可を得ることになるし、妊娠していたのは聞いていたので、公然・政治的に活発にできる条件ではない、公然・政治的に活発にできる条件ではない。公然化せず警備体制は厳重だった。７３年夏まではそういう状態であった”などと述べ、その後７４年の夏、被告らを含む組織的部門は、独自にアパートを借りるほどには保安がゆるやかになっていた、と証言しました。軍事的部門の同志たちはドクターの指揮下にあり、行動は自由ではなかった、とも答えました。

そこで検事は、３時で切りがいいのでここでいったん休憩します、と言って、２５分の休憩となり、３時２５分に再開しました。

再開したとたんに、丸岡証人は「さきほど答えをあいまいにしました。はっきりさせておきます。パリに居たことは否定しない。消極的肯定」というようなことを言っていました。

検事はアブハニが誰かにボディーガードを命じる場合について、さらにくり返し質問しました。丸岡さんが言葉がスムースに出てこず、また言いなおすだびに違う弁明に聞こえて、意味が取りずらく、「今回も記録を取ることに集中しない」と決めた私は、聞くのも書くのもどちらも中途半端です（そのため「　」で書くのがむずかしいので、「　」をへらしています）。なぜなら「　」は直接話法のため、きちんと記録していないと論旨不正確となり、「　」にすることができません（了解の程）。

アラブ人がつかない時は、保安部局が日本人をつけるよう指示し、ボディーガードに日本人がなる時もある、と話していました。例として、アラブ人が同伴できないヨーロッパ行きの時は、日本人がつくと。

丸岡証人の当時の活動

さらに、丸岡さん自身の軍事訓練への参加に関する質問。７３年５月にＶＺ５８（注：リッダ闘争の戦士を送りだした後の弾圧で、自供者を出した総括

から、戦闘団的あり方を克服しようとした組織。党組織を目指して、日本赤軍と共同しようとしたが、成立できなかった）の人とパリで会った話、どんな話をしたのか？　さらにその後重信被告と、いつ、どのように会ったのか？を検事が質問しました。丸岡証人は重信と４月にレバノンで会ったと言うと、その目的を聞かれ、「メイ君が生まれたので、お祝、そのついでの話など」と答えています。

アブハニとの共闘上の問題

その後の時系列にそった軍事訓練がバグダッドで行われたことを語り、さらに、のちにドクターとは矛盾があったので、その現状を話した時に重信被告に会ったと言ったので、検事の質問がくり返されました。「ドクターとの矛盾とはなにか？」と追及し、「ドバイ作戦の準備で出た共闘上の問題」と丸岡さんが答えると、検事は、「当時ベイルートにアブハニと重信被告がいたのですね。軍事部門に生じた問題を重信被告に言うのですか？」と追及。「単に現情報告をしただけ」と丸岡証人。

検事は「軍事部門は秘密活動ですね、公然の活動の重信被告に軍事のやり方を話しするのですか」「具体的なことは話していない。当時ＰＦＬＰの共闘の責任を自分が取ることになっていたので」と丸岡証人が答えたところから、ドバイ作戦へとさらに話が進みました。

ドバイ作戦の目的は？と聞かれて、「資金調達でした」と答えました。獄中からの解放の人選は当初から２名だったのか？　ドバイ作戦のランディング地がなぜリビアなのか？　リビアでの受け入れ見通しは？　アブハニとの間にあった矛盾とは何か？それらをあれこれ追及したのち、重信被告にわざわざ会うのに具体的な内容を話さないのがあるのか？と、皮肉を込めて追及しました。

さらにドバイ作戦について、「７３年８月のパリ記者会見は誰の指示だったのか？」「記者会見を計画したのは誰か？」「ＰＦＬＰがすべてセットしたと言っていますが、足立公判では違う答えを方をしているが」と、つぎつぎ追及していきました。

丸岡証人は足立公判では、ドクターから聞いた話を述べたこと、実際、日本人のグループの方も協議していたことでもあった。日本人からのちに経緯を聞いた。あくまで伝聞であることを強調した上で、結論的に「作戦が終わってみると、部隊は歓迎されていないようだし、ＰＦＬＰは関与を否定するわで、日本人は、政治局にどうなっているのかと問い合わせた。政治局に話ではドクターの独走とのことだったので対処を求めた」と証言しました。

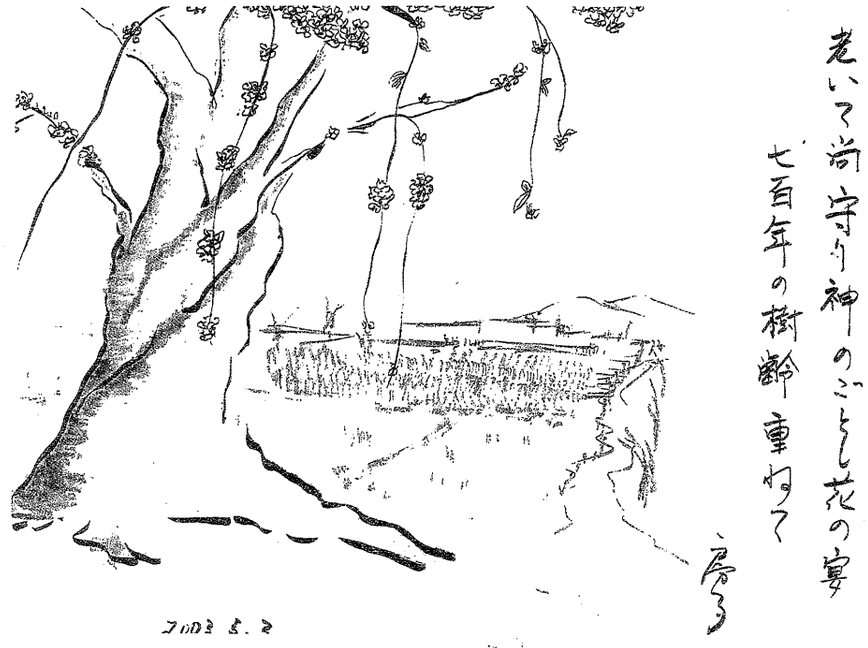
「それで足立に白羽の矢がたった？」と、証言にのっかって検事。ドクターは無方針状態で、政治局の方からきつく言われたので、足立に頼んだみたい、と説明しました。「ドクターが白羽の矢をたてた？」とか、「ＰＦＬＰが積極的に行ったものなのか？」と検事が質問をつづけます。「まず動いたのは日本人。政治部局に訴え、政治局から圧力をドクターに。“渡りに舟”ということであった」と丸岡証人。

耳鳴りで質問が聞こえない

ひきつづいてそのことを聞いていた時、「耳鳴りがして質問が聞こえないので、もう一度言ってほしい」と、丸岡証人が言ったので、検事も一瞬シーン。「休憩にするか？」「もうやめるか？」と裁判長。検事も「ちょうど切りが良いので、今日はこのまま、打ち切りましょう」と言うと、丸岡証人本人が、「いや、大丈夫です。降圧剤飲んで、９５の血圧で耳鳴りするのです。よく聞こえないが、心臓への負担ではないので、大丈夫です」と、言いはっています。うーん。検事も弁護士も「終わりましょう」と言ってるのに、証人が大丈夫だとねばるので、裁判長から「私も倒れたので。倒れたあとに、あまり無理しないでください。顔色もよくないです。今日はもう打ち切りましょう」と声がかかって、やっと本人も了解しました。体調を我慢して、丁寧に答えようとする姿勢が、かえってあれこれ言おうとするために混乱になり、本人も不本意だったのではないかと思います。

次回公判は、５月２７日１時１５分からを確認して、「証人は結構です。それでは閉廷します」と告げました。みんな名残りおしそうに、心配顔で丸さんを見ているけれど、丸さんの担当警備が傍聴席を見るのをさえぎり、あいさつもできないようにしているために、せっかく丸さんと顔を合わせたかった人々、とくに戸平さんなどもあまりに痩せてしまったために、丸さんの目には写っていないようです。丸岡さん無理しないでほしい！

よく見ると、あれ！という人々もいました。いつもよりたくさんの友人たちです。丸さんと会いたい人々がたくさんです。みんなにお礼のあいさつをくり返しつつ、全員の退廷をへて、私の退廷です。丸岡さんにも傍聴人を見送るような順番になるといいのですが。時計を見ると４時過ぎ。



花との出合いが嬉しい帰り道

５時５０分、帰舎のために大型バスに乗り込みました。日比谷公園のまわりをぐるりとまわり、ラコスタ日比谷パークホテルの前を通って、西銀座へ。プランタンの方へ曲がらず、まっすぐ三原橋交差点まで行きました。カーテンはいつもは西銀座あたりで上げるのに、今日は下りたままです。三原橋交差点を東京駅方向に左折れして、京橋あたりから高速道に入ったようです。高速道も今日は混んでいて少しずつしか進みません。

高速に入ってからカーテンが上がりました。徐行運転のため高速の低い道路の両脇は石垣です。

石垣のあちこちに普段見忘れているような、すずめのてっぽう、タンポポ、アレチノギクなどの草が、石垣の石の間にへばりついて生えています。少し目を転じると上の方の道路には、ツツジのけたたましい赤が見えます。

しばらくゆるゆる進んだのち、高速の渋滞表示で時間がかかりそうと見たためでしょう、いつの間にか一般道に出たと思ったら上野駅です。うわ！うれしいです。一般道をキョロキョロして進みます。だんだんに夕暮になりそうです。いつものように言問通りの方を逆に進むのかな？と思っていたら、ちょうど地下鉄の駅で、見れば「入谷」。そのあと三ノ輪から南千住、北千住をへて千住新橋に出て、荒川の川面をゆったり見て越えました。荒川を渡ってから少し下って、小菅拘置所に着きました。

途中、上野あたりで交通事故のあとに行き当たったり。選挙事務所が「民主党」と大書きにして景気よさそうに花を飾っていました。思いがけない花や草、樹と夕暮せまる街角で出会えて、うれしい帰り道でした。

部屋に戻るとしゃくやくの花、ひまわり、バラとたくさんの花に出会いました。植物に会うとホッ。とします。ありがとう。

荒川の土手に揺れ咲く姫女苑（ひめじょおん）
　　護送車の我みあげつ問いつ

刑期終え最前列に座す友と
　　並ぶ顔ぶれベイルートの街

語彙捜す証言台の友見つつ
　　いさかいの日々また懐かしき

前号の誤りの訂正とお詫び

23号11頁の左段の岡本さんについての表現に、通訳ミスの修正が残っていましたので、訂正してお詫びします。「戦犯」となっているところがありますが、「戦争捕虜」に統一します。

重信さんとの交流コーナー

兵役拒否運動とシオニスト国家

辻　邦

●自己保身のための運動か

今年２月上旬、『イスラエル　兵役拒否者からの手紙』（ＮＨＫ出版）という本が出版された。

タイトルを一見して明らかなように、パレスチナ自治区内での兵役を拒否しているユダヤ系イスラエル人の手紙や声明、手記等を集めたものだ。著者（というより編者と言うべきか）のペレツ・キドロンは、イスラエル国内における兵役拒否運動組織イエシュ・グブウルの活動家だという。

イスラエル国内の兵役拒否運動は、昨年これをテーマとする番組が放映され、また兵役拒否者が来日講演を行なうなど、日本でも徐々に知られるようになってきている。この運動について、日本ではおおむね好意的な扱いがされているようだ。戦時体制と言えるようなイスラエル国家の中で、ユダヤ系市民が軍務や兵役を拒否することには相当の勇気が必要だと思われ、それに対しては敬意を払いたい。

だがこの運動は、果たしてパレスチナ問題解決の糸口と成り得るであろうか？　それについてははなはだ疑問だと言わざるを得ない。

まず、この運動への参加者の動機に関してである。

『手紙』を読む限り、ほとんどの兵役拒否者が、パレスチナに対する連帯の表明としてではなく、自分たちの生活や安全を守らんがために兵役を拒否しているように感じられる。確かに多くの人が、パレスチナ人に銃を向けたり、虐殺したり、パレスチナ人の生活基盤やインフラを破壊することに対する嫌悪を隠さない。だが彼らの「手紙」の行間からは、ただ単にそのような野蛮な行為で自分の手を汚したくないという利己主義が読み取れてしまうのだ。残念ながらそこからは、イスラエルによって強いられているパレスチナ人の苦しみを理解し、彼らと連帯して問題を解決しようという意思が、ほとんど感じられない。

●シオニズム是認の姿勢

第二に、彼ら兵役拒否者は、決してイスラエルという国家のあり方、あるいはイスラエル国家そのものに対して異議申立を行なっている訳ではないという点だ。

彼らが問題としているのは、あくまで第三次中東戦争から後のことであり、決して１９４８年のイスラエル建国にまで遡行することはない。彼らにとって、イスラエルという国家の存在は“自明の理”であり、その意味では彼ら兵役拒否者もまた、シオニストの域を出ていないと言えるだろう。彼らがイスラエルという侵略国家の存在を認めている以上、彼らの運動とパレスチナ解放運動が連帯するという状況は、まず考えられない。彼らの主張は最も急進的なものでも、「イスラエルはヨルダン河西岸とガザ地区から完全撤退するべきだ」という程度のものでしかないのだ。

２０世紀初頭、ファシズムによる迫害の脅威が迫る中、多くのユダヤ人が、安住の地を求めて欧州を後にし、「約束の地」パレスチナへと移民し始める。だが、第二次大戦後、イスラエルで行なわれた裁判の中で、アドルフ・アイヒマンが証言したように、ナチスは資産家のユダヤ人から金を取って逃がし、多くの貧困なユダヤ人を強制収容所に送って虐殺している。イスラエル建国時のシオニスト指導層は、もちろん前者に属しており、ある意味で、貧しいユダヤ人大衆は、ナチス・ドイツと結託したシオニスト指導層に欺かれたと言える。

数百年に及ぶ苦難の歴史を背負い、ナチスとその眷属による大規模な迫害に恐れおののいたユダヤ人たちが、「自分たちの国家を創りたい」と渇望したのは当然かも知れない。だが、アラブ人やパレスチナ人がユダヤ人を迫害してきたわけではない。本来その責を負うべきは、キリスト教世界のはずなのだ。

だが実際には、アラブ人がその罪を背負わされている。イスラエル国家は同じ国籍を持つユダヤ系市民（その中には、中国人や黒人系アフリカ人としか見えないような人々も多数含まれている）と、アラブ系市民との間に合法的に区別、というより差別を設けている。これが自称「中近東唯一の民主国家」なるものの実態だ。

本来、侵略されたパレスチナ人もシオニストに踊らされた貧しいユダヤ人移民も、共に誤った民族主義の犠牲者であるはずだが、残念ながらウリ・アブネリなど少数の良心的な人々ですら、「ユダヤ人だけの国家の生存」を前提とするシオニズムの呪縛に捕らわれ、パレスチナ人の被ってきた悲劇に対する理解に欠けているように思われる。

●トロツキーの指摘

自分自身ユダヤ人ではあるが、反シオニストであったレオン・トロツキーは、１９３７年のあるインタビューで次のように述べている。

「今日、通常は、共通の領土を持たない民族は存在することができません。シオニズムはまさにこの考えに由来しています。しかし、日々生起している諸事実はわれわれに、シオニズムがユダヤ人問題を解決できないことを示しています。パレスチナにおけるユダヤ人とアラブ人の対立は、ますます悲劇的で、よりいっそう危険な性格を帯びています。……人類史は野蛮を基礎にした大規模な移民の時代を経験してきました。社会主義は最も発達した技術と文化を基礎にした大規模な移民の可能性を切り開くでしょう。これは、強制移住、すなわち、特定民族の新たなゲットーの出現ではなく、自由な同意のもとでの移動、あるいはむしろ一部の民族や民族の一部によって要求される移動であることは、言うまでもありません。同一コミュニティーに集まることを望む散り散りになったユダヤ人は、日のあたる十分に広大で豊かな場所を見出すでしょう。同じ可能性はアラブ人にも、またすべての散り散りになっている民族にも切り開かれるでしょう」

パレスチナ問題は最終的には、「民族」と「国家」という問題に突き当たるであろう。人間が、「わが民族は他民族より優秀である（やつらはわれわれより数段劣っている）」とか、「民族はすべて国家を持たねばならないのだ」といった共同幻想や強迫観念にしがみついている限り、パレスチナ問題はもちろんのこと、あらゆる民族問題や国家間紛争は解決し得ないのではないだろうか。

最後に、再びトロツキーの言葉を引用して拙稿を終わりたいと思う。

「ユダヤ人問題は、人類の完全な解放と分かちがたく結びついています。この分野で試みられるそれ以外のすべてのことは、一時しのぎであり、パレスチナの例が示しているように、しばしば両刃の剣にさえなります。」

地獄までは何マイル？

梁山泊

セネガル内陸部の大地は乾燥しており、果てしなくどこまでも続く。サハラ砂漠はすぐ北である。このあたりはサヘル地帯と呼ばれている。サヘルはアラビア語のサーヒル（縁、境界、沿岸、岸辺などの意）に由来し、西はモーリタニア南部から東はチャド中南部まで東西に帯状に延びている。

このような場所でもヒトは生きている。東京拘置所の新しい独房からは、外界が一切見えないと聞く。このような場所はヒトが生きていくのに最も不適当である。

サヘルの気候は厳しく、毎日の生活は極めて骨の折れるものである。殆どの住人はイスラム教徒であり、アッラーへの祈りが人々の心の支えとなる。それでも、広大な空間は保障されている。僅かな耕作期には牧畜が行なわれ、乏しい水で米を研ぐ。

小菅はどうだろう。「清潔さ」と引き換えの管理された空間を想像するに難くはない。

ライラさんは『同志に処罰でなく褒賞こそ与えよ』と証言席で述べたが、当然の要求である。『あらゆる犯罪は革命的である』というタイトルの本があるが、「犯罪」の立証さえない人たちを拘束し、尊厳を傷つけ、果ては狂気へと誘う装置こそは犯罪以外の何ものでもない。革命性は皆無であるが、国家の名の下に堂々と行なわれている犯罪行為を黙って見過ごす訳には断じていかない。犯罪装置としての国家については今更言及するまでもないが、東拘での措置を仄聞するにつけ、改めて心の底からの憤りを感じざるを得ない。

「犯罪」、「狂気」そして「テロリズム」。権力は常にレッテル貼りを行ない、真実を隠蔽してきた。全部を裏返してみると真実が顕れてくるだろう。「犯罪」、「狂気」、「テロリズム」という名前を冠せられた事象が、実際は何であるかが理解されるだろう。鵜飼哲氏は言う。『「テロリズム」と呼ばれる現象の多くは、その行為の主体の側からは同じ名前で呼ばれない』。

さて、今回のイラク攻撃で、また夜陰に乗じて進行中のパレスチナ侵略で、ブッシュが、ブレアが、ラムズフェルドが、シャロンが行なっていることを誰も「テロリズム」とは呼ばないようである。実に奇妙なことである。真の犯罪者、真の狂人、真のテロリストは誰か？石原に票を投じた３０８万の連中には到底理解し難いことであろうが、それさえ見分けが付かなくなっている現況は歴史上に例をみない前例を作り続けることだろう。投げられた賽はもとには戻らないのだ。

投稿

米国に強制連行された南米移民

小林　忍

１日本人強制収容所の歌集

「敵船ショーニーの甲板に在りて　心ゆらぐこの時出でし　大き海の虹」「『ロス・パサヘーロス』と甲板の拡声器は叫べども　上陸地を知らぬ船客われら」。

太平洋戦争開戦から半年後の１９４２年６月、米国は南米ペルーに謀略を仕掛け、在ペルー日本人移民の主力２０００人を米本土の収容所に強制連行した。

行く先を教えられず、家族と引き離され、異国に連行される。「戦争」の一語でかれらは自らを襲った事態を呑まざるを得なかった。

日本人を強制連行した米船はペルーを６月１５日に出港、パナマ運河を通過し、メキシコ湾を北上、ニュウーオールリンズで下船。その後、日本人は数カ所の強制収容所に、陸路送られた。短歌を続けよう。

「（パナマ）運河警備兵あまた乗り来てものものしく卑屈なるさまは　わが見せざらむ」「この大きな戦いの現実の　一隅に敵国に送らるる　わが一家あり」。

そして敵地米国に船が着いた。「戦へる　敵国の港に船はてぬ　下船準備に嘆きすらなし」「灯きらめくニューオルリヤンス　着きて知る　明日は妻子と別れねばならぬ」。

南米から拉致された日本人は、ケネディ、シーゴビルの強制収容所に隔離された。

「汗あえて　歩き廻るを日課とし　収容所生活に耐えゆかむとす」「屋外で童話劇脚本書きつつ　ここは敵国収容所ぞと思ふ」「交換（捕虜）の噂も消えて　１年も寂しく過ごす　シーゴビルの里」。

１９４２年、ルーズベルト大統領は、米国内にいる日本人移民１２万人を強制収容所に押し込めた。この事実は、あまり戦後日本人の関心に上っていない。それでもまだ米国移民が置かれた「強制収容」の事実は日本で紹介されている。ところが、米国が「日本人強制収容策」の一部として、本来主権外にある南米諸国からも米本土に強制収容した在南米日本人の運命については、まったく、といっていいほど知られていない。

第二次大戦参戦の機を窺っていた米国は、日独伊移民が多い南米各政権の封じ込めを始めていた。ブラジルでは「サントス沖にUボート出現」のデマが流布され、海岸部に住む日独伊三カ国移民が内陸部100ｋｍ以上に移ることが命じられた。しかも24時間以内にだ。彼らが着の身着のままの生活を強いられていた頃、親日国ペルーでは米特務機関による反日世論形成の工作が行われていた。圧力に屈したペルー政府は、会長、教師など日系社会の中核に対し「国外追放令」を発した。国外退去を命じられた日本人たちは、カヤオ港で米国船ショーニー号に強制乗船させられ、米国の収容所に運ばれた。米国による民間人拉致・誘拐ではないか。

米国が勝利した後、収容者は無補償で放り出された。ペルーから連行された２千人は、市民権も与えられないまま、米国残留を余儀なくされた。後に日本に帰国した「ペルー移民」もいるが，ペルーに戻れたのは４～５人しかいなかった。

９０年代に入り、米政府は収容者への謝罪と補償を行った。この時、「強制連行」「強制収容所」の呼び名を使うな、と抗議してきた団体があった。全米ユダヤ人協会だ。

さて、ペルー日本人社会はどうなったのだろうか。やや古くなるが 96 年に現地紙に掲載した記事を紹介したい。

２ペルー日系人社会

〈日系人として初めて、国の最高位である大統領にアルベルト・フジモリが就任した。日系人の栄誉は高まったが、残念ながら日系社会が産み出したものではない。むしろ、日系社会とは関係が切れていたから出馬できた、という評がもっぱらだ。日系社会の消極性を現す好例といえる。

「日系人は政治を嫌がる」

日系初の国会議員と二世としては初めて日系人会長を務めた川下マヌエル・日系文化基金会長（67）は断じる。

ペルー日系社会の脱政治化は、米国による準戦争的謀略で始まったといわれる。

太平洋戦争の戦端が開かれる前年の 1940 年、親日国といわれたペルーの首都リマ市内で、日本移民が経営する床屋、食料品店などの商店が襲われる反日暴動が発生した。煽ったのは地元紙。米国の特務機関が暗躍したといわれ、メディアを通じて反日世論が、上から形成された。日米開戦後にはペルー日系社会のリーダー１千８百人が、米本土の強制収容所に連行された。終戦後、収容所の門が開放されるが、米国は補償もせずに収容者を放り出した。ペルーに戻れたのは、ペルー国籍の日系二世と結婚していた４～５人だけといわれている。

さらに、ペルーは戦後移民の受け入れを禁止した。殖民としての日系社会の活力減退は、想像に難くない。

戦後、ブラジル日系社会では「日本は戦争に勝った」と信じる「勝ち組」と、「日本は敗戦した」と脱日に進む「負け組」との間で死者を出す武力抗争が起きていた。ブラジルから来入した「勝ち組」の煽動にペルー日系社会は動じなかった。「敗北」の実感がもっとも濃かったからかもしれない。

戦前、親日的といわれたペルーとチリ、親独のアルゼンチン。南米を自国の裏庭と見る米国が、各国に圧力をかける構図は、今も昔も変わっていない。日独伊枢軸国移民を多数抱えたブラジルにはアマゾン侵攻という軍事的恫喝をもって、対枢軸国参戦が強要された。これによって、日系兵士が皇軍と連合軍の軍旗で二分された。敗者の戦闘旗が血にまみれた時、日系社会は深刻な対立と苦悶を迎えた。

強制連行という「勝者の犯罪」でペルー日系社会は逆に、嘘のような「平穏」を得た。移民一世社会の背骨が打ち砕かれたことにより、二世の結束と登場が円滑化したことは皮肉だ。

「それでも、８年かかりました」

８１年に二世が初めて日本人会会長に選ばれた。マヌエル会長は日本人のみを会員対象とした会則を、日系ペルー人も入会できるように改正、名称も日系人協会に変えた。そして、二世のスポーツ団体・ウニオン協会、五つの日系人学校、各県人会、日系文化基金、日秘（ペルー）商工会議所、１２の地方日系人会を団体会員として傘下に納め、日系社会の一本化に成功した。施設も沖縄県人会館を除き、すべてヘスス・マリア区の日系人会館に集中、各県人会もこの中に事務所を持つようになっている。

会議はスペイン語。これが世代交替を早めた。もっとも二世の平均は６０代。三世の役員もいる。戦前は「たのもしに二世は入れるな。などと二世がバカにされた」が、戦後は無い、という。前記の事情から見れば理解できる。

日系人口は５万人、混血を含めて８万人と推測されている。すでに四世の時代に入っているため「日系人枠の再検討が必要」と強調するマヌエル会長は、パンアメリカン日系社会を土台に「パンナム日系商工会議所」作りを提唱する。しかし、「ブラジルとアルゼンチンは困る。決まった代表がいない」とも。

「（日系社会の）分裂はリーダー不在だから。批判を受けてもやれる強いリーダーが必要」と、乱立のブラジルにアドバイスする。

船舶振興会の笹川良一、サラ金の神内良一との付き合いも深い。援助をくれるのなら「誰」を問わない。南米気質を取り込んだペルー日系社会はしたたかだ。

市会議員は街の旦那か――お手盛り手当てに「ノー」の票

谷矢　健

＜「出席手当でっせ。議員が議会に出る度にお金が貰えるんです。給料の二重取りですわ。サラリーマンが出勤したからと言って、給与と別に銭くれますかあ。議員はやってるんです。とんでもあらへん」大阪府門真市で議員報酬の二重取りとも言える出席手当の受取拒否を公約にしたトラック運転手のＴさんが４月の地方選で初当選した。出席手当は１回につき２５００円。少額だが出所は市民の財布。筋の通らない金である事に間違いない。そのため岸和田市では５月から廃止している。

Ｋ市は人口約１４万。松下電器の本社を除けば、零細中小企業が多く、個人所得も府下で２番目に低いと言われる。レンコン畑が広がる農村地帯に住民

の流入が始まり、人口が急増したのは東京オリンピック後だった。市議会は公明党が８議席を占めて最大会派となっている。公明党本部は出席手当にこう回答してきた。

「本部としての見解は無く、各議員にまかせてある」

出席手当、正式には「費用弁償」と呼ばれ、地元の旦那衆が議員をやっていた戦前のなごりといわれる。この手当、市へ返上すると寄付行為になる。そこで受取拒否をすると法務局の供託扱いとなり、市財政への返還は難しくなる。

「せやから廃止を要求してるんですが、４会派は質問にも答えません」（Ｔ議員）

４会派とは第１会派の公明党を筆頭に自民系保守２会派、そして、民主党系「市民リベラル」を指す。松下労組役員も参加する市民リベラルは「名前負け」のそしりはまぬがれそうにない。

４会派による無風議会に風穴を開けたのが無所属のＴ議員だった。市助役の不正な税滞納、非公開の常任委討議などをＴ議員はホームページ(ｈｔｔｐ：ｗｗｗ１．Ｏｄｎ．ｎ．ｊｐ／ｃAh27920 で公開していた。その電子掲示板に市民が書いた意見が問題だ、として議会はＴ議員に問責決議をした。まるで４会派による異端裁判だ。

ところが不正税滞納の助役にさらに疑惑が持ち上がった。市発注の公共工事を巡り、贈収賄で府警から聴取を受けたのだ。そして警察から帰宅後、首つり自殺を図り重体となった。議会は蜂の巣をつついた騒ぎとなり、Ｔ議員のホームページへのアクセスは７６００件に急増した。「町の自浄作用が起ってる。市、始まって以来の事ですわ」（５０代の男性市民)。大阪府下３３市で出席手当を今だに支給しているのは９市。最高額は大阪市の１４０００円。そして堺市７０００円、高槻市９１００円（特別委のみ）と続く。野党第１党の民主党に尋ねた。「県連に任せてある。（受給しているか）実態の把握はしていない」。＞

これは、ある雑誌の‘００年１月号に掲載した原稿です。Ｔ議員は重信さん関連で家宅捜索をうけていたことを後で知りました。そのＴ議員は今年の統一地方選で、同市でトップ当選を果たしました。市民の見識が「デッチアゲ」に勝った、と言ったら言いすぎでしょうか。

読者からの声

毎月会費を送ってくださる大阪のＫ．Ｍ．さんから、その都度、振替用紙に書きこまれた短いメッセージを集めて、皆様にもご紹介します。暖かい視点のメッセージに編集部はどんなにか支えられています。

＊「オリーブの樹」ありがとうございました。近くの公園のオリーブの木も剪定されて少し寒そうにしています。地理の知識に疎いので、今頃のパレスチナの気候をよく知りませんが、東京拘置所の獄房と世界各地が熱い心で結ばれて、みんなが元気に生きられることを祈ります。（０２年１１月）

＊「オリーブの樹　第１９号」ありがとうございました。貼ってあった折り紙に制作の皆様―重信さんのやわらかな空気を感じています。

今年が佳い年でありますように。（０３年１月）

＊風はまだ冷たいですが陽ざしは明るくなってきました。でも拘置所の獄房は寒いだろうと案じます。パレスチナの現状もまだ暗いです。イラクでの戦争が阻止されることを願っています。地球を巡る反戦のデモに未来への大きな希望を感じました。

どうぞお身体大切に。いつもありがとうございます。（０３年２月）

＊ここ大阪でもイラク攻撃に反対する人々が日に日にその立場を明らかにしています。

世界中で巻き起こっている平和を願う熱い想いがイラクの、パレスチナの戦争を止めるようにと祈っています。（０３年３月）

＊今日、新聞には、「バグダッド陥落」の字が踊り、映像では、「喜ぶ市民」が伝えられています。でも多くの人々が侵略に悲しみ憤っていると思います。

その悲しみと憤りと一緒に居たいです。戦争はいやだ！という気持を持ち続けたいです。（０３年４月）

＊新馬はほんとにひどい！生命をじわじわ殺しているとしか思えません。重信さんがあんなに好きだった桜の木も切ってしまうなんて…。自由の身となった重信さんとライラさんの再会を夢見ます。１日もはやく実現しますように。（０３年５月）

投稿　シゲに捧げる「私小説」その 21

山田美枝子

本堂で父の三十三回忌の読経がはじまった。父の戒名、實雲院重善捷道居士、というのが読み上げられる。真言宗豊山派の若い住職の読経の声は、よく響くいい声だ。詩真子が小声で私に、

「いい声でしょ、声楽専攻だったんだって」

といった。私は内心、坊主になるための学校に声楽課があるのかしら、とへんな気がした。詩真子が続けて、

「お花もお供えも忘れちゃったわ」

といった。そういえば、まったく親族からのお供えものがなかった。ただ真新しい白木の卒塔婆が三本たてかけてあった。私は内心おかしかった。いつも世間の常識から外れている家庭だった。花も供物もない祭壇にただ朗々としたいい声の読経が流れた。私は焼香の煙のあがる天井を見上げた。線香の煙に燻された天井には、思いもかけぬ色っぽさで、半裸の天女が四人舞っていた。

一人の天女の顔が、娘のほしみに似ている。ほしみは、今日はついてこなかった。近ごろ同棲をはじめた輝彦のマンションで、昼近い、今頃起きようとしているころだ。

ごくなにげなく、輝彦のマンションに住み初めてしまった。自分の車で衣類など少しずつ運んでいる。友達の部屋に何気なく泊まって、そのまま帰らなくなった、というようななにげなさで同棲がはじまった。

「家にいるほうが、なにかと楽でしょう」

「パパもママもうるさ過ぎるもん」

「あたりまえのことを注意するだけでしょう」

「それがあたりまえじゃないの、現代の若者の常識からずれてるんだよ」

「だって結婚するまでは、普通の娘らしく家にいたほうが男の子の方から見たって、安心じゃない」

「いまどき、親の家にいない友達のほうがおおいわよ」

「なんで、結婚しないの」

「いきなり結婚なんて、信じられない、見極める時間が必要なのよ」

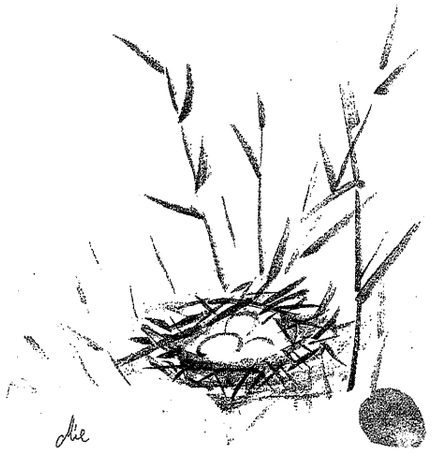
私は、相手にも見極められているよ、と言いたいところを我慢した。私の友人が、やはり八年間も同棲している娘との会話は「ただ喧嘩にならないように気をつけているだけ」といったのを思い出したからだ。喧嘩をしてもただ出ていってしまうだけで、娘の行動がつかめなくなるだけだ。常識の枠で縛ろうとしても、二十歳を過ぎた娘には無駄だ。ただ、だんだん痩せて、色っぽくはなっているが、不健康な感じにもなっているのが心配で、家に来たとたんに食事をさせる。なにを出しても、おいしい、おいしい、といって食べる姿は哀れなほどだ。食費を削っても恋に生きているのだろう。そして時折、突然朝帰ってくる。親の家を言い訳にだけ使っている感じだ。

読経が終わり、五人の焼香が済むと、外に出て墓場にむかった。寺の隣の花屋で亜佐子が花を買ってきた。ついでに寺の道路向かいの酒屋でカップ酒も買ってきた。二人の兄は一口づつ飲み、

「じゃあ捷重郎さん乾杯」

と父の名を呼んで、墓にかけた。

（つづく）



重信房子さんを支える会とは

重信裁判は、「パレスチナ解放闘争との連帯を起点に、日本社会の変革を追求した日本赤軍兵士の重信房子さん」にかけられた、長期勾留を目的とする政治裁判と言えます。その為、公正な裁判を求め、社会の不正に疑問を持つ有志が集まり、「重信房子さんを支える会」として、０１年４月より救援活動を始めました。

重信公判の争点は三つあります。

① ７４年にＯさんが日本出国のために使ったとされる旅券偽造。

② ７４年、フランスで不当逮捕されたメンバーの奪還作戦として闘われたオランダ、ハーグのフランス大使館占拠での逮捕監禁・殺人未遂。

③ ００年の逮捕時に使っていた旅券偽造。

重信さんは、③は認めていて、関係者に機会あるごとに謝罪を表明しています。しかし、①②については、全くの無実として争っています。

私たちは、運動の柱を次の２点に定めました。

① 裁判維持に必要な救援実務とカンパ集め。

② 世直しを求める人々との語り合い、交流の場をつくる。
「オリーブの樹」は、この目的のために発行しています。

次回公判日程

６月２３日（月）１３時１５分 （丸岡証人）
７月２８日（月）１３時１５分
１０月 ７日（火）１３時１５分
７月１６日（水）１３時１５分（丸岡証人）
９月 １日（月）１３時１５分
１１月２６日（水）１３時１５分

（ ）内は、証人名です。敬称略。

東京地裁（ 最寄り駅 地下鉄 霞ヶ関 ） １０４号法廷

傍聴券の配布は、開廷の２０～４０分前です。配布の方法は、抽選ではなく、先着順です。法律を学んでいる学生が単位を取るために傍聴に来て、満席になることがあります。確実に傍聴を希望する方は、早めに地裁前に集合される方がいいでしょう。

後記

予告しましたように、重信さんの「独居より」は、今回２ヵ月分をまとめて掲載しました。少し時期がずれた部分がありますが、お許しください。

少し前に提起しました各号のテーマというのは、無視された形で、様々のテーマが寄せられましたが、それはそれで面白いかなと思っています。投稿原稿も含めて、これらの主張に、皆様から意見が帰ってきたら、さらに面白くなるでしょう。お待ちしています。

東京拘置所の新舎の様子は、聞きしにまさる非人間的な構造で、設計者がそのことをどのくらい自覚しているのだろうかと思うと、なにやら空恐ろしくなります。自覚してやったとしたら、冷血漢だろうし、無自覚ということなら、何を基準に建物を作るのか、人間としての姿勢自体を疑わざるを得ません。

丸岡さんの体調が気になりますが、１３日より、２７日は、少し健康そうに見えました。彼の体調を気遣いながら、裁判が進行していますので、丸岡出廷は、７月１６日までと確認されました。どうかその間健康第１に過ごされることを願います。と言いつつ、今回も大急ぎで、校正援助をお願いしてしまいました。おかげで、大変助かっています。ありがとうございました。（Y）

連絡先 〒105-0004 東京都港区新橋 2-8-16 石田ビル４階
救援連絡センター気付 「オリーブの樹」事務局
郵便振替 00110-4-613941 オリーブの木
銀行口座 三井住友銀行 赤羽支店 809-3687269 オリーブの樹

「正誤」表

第24号

①7P左　1行目　（小見出し）　　通し新緑を遮ぎる車窓を
→新緑を遮る車窓を通し

②7P左下から20行目　　ニュースそ聞いた→ニュースを聞いた

③18P右下から5行目　　新馬は→新舎は